人間の値打ちと平等について考える

東京医科大学霞ヶ浦病院 外科学第4講座
生方 英幸

私は、俗人愚人の代表のような人物でありますが、これまでの人生経験の中でかかえてきていまだに解決できない、理解できない事柄を書き連ね、賢者識者のご意見を賜りたいと考えております。

「*天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず*」と言ったのは、かの福沢諭吉翁であります。福沢先生は天下の偉人であり、そのお言葉には私どもには考えがおよばない深い深い意味合いがあることは、疑う余地もありません。しかし、私のような凡人にかかってしまいますと、そのお言葉の深慮された部分がわからず浅薄な理解をしてしまい、次のような疑問が湧きあがってきてしまうのです。

すなわち、本当に人間は平等なのでしょうか。さまざまなシチュエーションにおいても、それは真理として存在するものなのでしょうか。世間一般の人々は心底、人間の値打ちに差はないと考えて、日々実生活を送っていらっしゃるでしょうか。どんなに論理的で真理をついた考え方であっても、現実と矛盾するものは無用の長物であり、検証を要します。私の疑問点を挙げ、考察することとします。

まず、男性と女性が本当に平等であるかどうか考えてみたいと思います。一部の女性国会議員や大学教授などがマスコミに登場し、しきりに男女差別の問題を論じているところをみると、イスラム圏の某国ほどひどくはないにしろ、わが国においても男女間の不平等が存在することは事実なのかもしれません。いわく、出世が遅い、重要な役割が与えられない、給料が安い、家庭に閉じ込められる、土俵の上に上がれない等々。しかし、女性にとって不利なことばかりでしょうか。JRのレディース割引、食べ放題バイキングの女性料金、パチンコの女性専用台など得することも多いし、極めつけはタイタニック号のように船が難破した場合、子供や女性は優先的に避難させられますが、男性はただ男性であるというだけで後回しにされ、やせがまんしながら死んでいかなければならないのです。死にたくないという感情は男性も女性も同じであろうし、死の苦しみも男性に軽いということはないはずです（女性はかよわいから？ でも、平均寿命は男性より女性の方がずっと長いのは何故？）。このように、男性と女性の間には、それぞれ有利な点もあり不利な点もあると思われますが、女性不利な状況ばかり問題となるのは何故でしょうか。ひとつには、私は差別と区別が混同されていることにあると思っています。広辞苑には、差別とは「差をつけて取り扱うこと。わけへだて」、区別とは「違いによって分けること。また、その違い。区分け。けじめ」と書かれております。つまり、差によって区別することを差別というのでしょうか。この差をつけるということが多くの問題の出発点となっているようであり、悪い意味の区別として使われることが多いようです。

陸上競技、水泳、バレーボール、卓球、柔道、剣道など、男女ともに同じルールで行うスポーツはたくさんありますが、基本的に男女別々に勝負が行われます。これは差別でしょうか。当然、体力差を考慮した区別に属するものでありましょう。これを体力差といわず能力差といえば、差別とい

うことになると思います。男性が得意な分野、女性が適している分野があることは当然あってしかるべきであり、原始の時代から狩りや戦いは男性が前面で行い、母性が大事な子育てや家事は女性に負うところが大であったのは、実に人間という生物の動物学的合理性（そういう言葉があるかどうかは知りません）に合った役割分担といえるのではないでしょうか。

次に選挙権について考えてみます。これについては、永らく女性に与えられなかった時代背景があり、政治の世界での女性の不満は多々あるものと思われます。選挙権の男女差別については言語道断で、あってはならないことであり、これに異論をはさむ現代人はほとんどいないものと考えられますが、真面目に仕事にはげみ家族のため社会のために貢献している人の一票と、仕事もせずに刹那的な享楽を求め遊び歩いているようなオニーチャン、オネーチャンがただ成人というだけで同じ一票を持っているということが、正しい意味での平等なのでしょうか（昨今では選ばれる側の政治家にも問題が多いので、どっちもどっちで相殺されてしまっているようですが）。

国民の生活を守るべき司法制度も、本当に万民に平等でしょうか。特に少年の犯罪において、殺された被害者の名前や顔写真は公表されるのに、殺した側の加害者は公表されません。被害者は殺されてしまっているから人生のやり直しはできようはずもないのに、加害者の方は更生の余地を考慮され、世間一般の感情とは遠く離れた判決がでることも珍しいことではありません。この点では、まったく加害者側の方が優遇されているという不平等な印象を持つことを禁じえません。また、わが国の司法制度は現在、死刑をどうするかという難しい問題もかかえておりますが、安易な死刑廃止の声がマスコミに過大評価される傾向があるようにも思われ、私はもっと被害者の親族の感情も量刑に反映されるべきではないかと思っております。

さて、われわれの医学界にも問題はないでしょうか。同じように努力をしても、教授や理事になれるのはほんの一握り。これは運や才能に左右されることが多く、やむをえないことは他の職種も同じなので、あきらめもつくことでしょう（もって生まれた才能の差を認めてしまいましたが、これは人間は生まれながらにして差があり不平等であることを肯定してしまっていることに他ならない？）。しかし、納得がいかないのは、研修医をはじめとする勤務体系です。病院に勤務するどんな職種でも、医師以外は労働基準法に守られているのに、なぜ医師だけはタイムカードもなく当直明けもなく休憩なしで働かなくてはならないのでしょうか。研修医にいたっては、ほとんど無給で不眠不休ともいえる勤務に従事しているのが現状であり、ある大学病院で研修医の過労死が問題となり、この見てみぬふりをされた暗黒の現実がクローズアップされたことがありました。これからどんどんこの問題がマスコミに登場して改善されてくるのだろうなと喜んでいたのですが、その後大きくこの問題をとりあげるメディアもなく、相も変わらず医師批判の記事ばかりが好んでとりあげられているように見えてしかたがありません。そして今日も大学病院の、特に若手医師は、人間らしい扱いもされず、単なる消耗品の如く不平等の最下層に甘んじているのです。

このように、さまざまな場面において人間はまったく平等というわけにはいかず、いろいろな状況により自然発生的に、あるいは意図的に生じた差別や区別の中で生きていかざるをえないのが現実のようです。しかし、あえて人間の値打ち、価値を他人から押し付けられ、お前はこれくらいのランキングの人間なんだよと決め付けられることには、多くの人が不快感を示すに違いありません。ところが、逆に大喜びされる場面があります。それは栄典制度です。叙勲や褒章制度のことです。

インターネットで栄典制度について調べてみました。平成13年10月29日の「栄典制度の在り方に関する懇談会報告書」をみますと、「第１章　栄典の意義」のところに「栄典とは、国家や社会への長年の功労、あるいは社会の各分野における優れた行いを国家が顕彰する制度」とあり、「国民の価値観が多様化している現代において、個人が自律・自助、自己責任の意識とともに他者の存在を認めて思いやる心を持ち、そして社会の構成員としての権利・義務・責任の意識を持つことは、健全な社会が成り立つ上で不可欠である。このような公の精神が広く国民に行きわたる上で、国家・公共への貢献に対し国家がこれにふさわしい評価を行うことには大きな意義がある」「多くの受章者が自らの功績が評価されたことに、感激と喜びを感じている。日々公共のために努力を重ねている人々、地域において高い志をもって公共のための活動を行っている人々にとっては、栄典は大きな励みになっており、期待も非常に高い。栄典は、このような意義を有する制度として、存続させることが望ましいと考える。」（抜粋、「　」内は原文のまま）

叙勲制度は官尊民卑の典型といわれ、国会議員や公務員といったいわば国側の職種が優遇され、民側の職種は一段も二段も下に扱われているようです。私はかねがね思っていたのですが、たとえ国のため公のため人のための職業ではあっても、そのために得た報酬で生活をしている以上、一般のサラリーマンや商業店主などの職種となんの変わりがありましょうか。本当に尊い仕事があるとしたら、生活の糧は別なところから得ているにもかかわらず、その他に無償で行っている行為ではないでしょうか。従って、たとえば問題をかかえた諸外国の人々を支援するための非政府団体などが最近脚光を浴びておりますが、そこに属する人達がどのような意識を持っているかは知りませんが、きっと世のため人のための有意義な大変な仕事なのでしょう、しかし彼らにしてもまた、その行動に対しての報酬が支払われ、それで生活ができている以上、真面目に仕事に励んでいる商人や工員達となんら変わりがあろうはずがなく、どちらが偉い仕事であるかを論ずることはナンセンスなことだと思います。また、アジアの某国に行って感じたことは、民営の販売店では日本と同じような態度、サービスが受けられるのに対し、国営のそれは最悪の仕事態度でした。わが国でも、国鉄を例にとっても民営化前後ではかなりの変化があり、民営化されたがために改善された面が少なからずあったように思われます。このように、国側の方が民側より尊い仕事をしているわけでもないし、熱心さ、情熱などもむしろ民側の方が勝っているのではないかと感じている人は、私以外にも少なくないと思われます。それに加えて、他人を正しく評価することは非常に困難であることは、想像に難くありません。従って、ある職種を何年やったから、ある役目を長年やったから勲何等を与えるということを国の名目で定めていること自体がおかしいことは子供でもわかることであり、はなはだ時代遅れといわざるをえません。日本国憲法は、全て国民は平等であると唱っておりますが、国民が一生かかってやりとげてきた事業、存在意義を国がわざわざ等級をつけてその人の値打ちの評価をしてやることはないように思われますが、いかがでしょうか。これこそ国が行っている「差をつけて区別する；差別」ではないでしょうか。

まだまだ疑問に思っていることはたくさんありますが、そろそろ紙面もつきたようなのでこれくらいにしておいて、読者諸氏のご意見を賜りたいと思います。どうか私を正しい考え方に導いてください。皆様のご意見を拝聴して、私はこれまでの人生を悔い改め、今後勲章をもらえるくらい偉い人になりたいと思っております（……ん？）。